

# あるナラティブ・セラピーにおける why-questionが映し出す社会<sup>i</sup>

饒平名 尚 子

## 1. はじめに

アメリカで録画された実際のナラティブ・セラピーの映像記録を分析する中で、クライアント（相談者）が答えに詰まり、少々困っているように見える部分があった。それはセラピストによって頻繁に*Why?*および*How come?*が使われた箇所である。相談者Jessie（仮名）は11歳（ないしは12歳）のアフリカ系アメリカ人で“暴行事件”を犯したため裁判所に命じられてアンダー・マネージメント（怒り管理）のセラピーを受けに来た。一方、セラピストのMadiganはカナダ在住の中年白人男性である。以下はその部分の抜粋である。スクリプトでは*why*と*how come*を太字で示してある。この会話はセラピストが少年に「良い少年の評判と問題の多い少年の評判のどちらを持ちたいと思うか」という質問をするところから始まる。

### 会話例1<sup>ii</sup>

Therapist: Which would you prefer to have – a troubled boy reputation or a good boy reputation?

Jessie: Good boy reputation

Therapist: **How come?**

Jessie: 'Cause I don't, I don't wanna be bad. I don't like to be bad or do anything.

---

i データ DVD におけるスクリプトの一部を研究目的で使用することを psychotherapy.net から許可をいただいた。ここに感謝を記したい。また、ナラティブ・セラピーにおける why-question の使用については石河澄江氏に大変貴重なご意見・ご指摘を多数いただいた。ここに記し、感謝の意を表したい。

ii 本研究ではクライアントの名前は Madigan (2011) の中で使われている仮名 Jessie を用いて表記する。

Therapist: **Why not? Why** don't you want to be bad?

Jessie: 'Cause then you will get suspended from school or something, something like that.

Therapist: Yeah. And is that a bad thing if you were to get suspended?

Jessie: Yeah.

Therapist: **How come** it would be a bad thing if you were to get suspended from school?

Jessie: 'Cause then, you'd, if you're out then you then don't learn that much.

Therapist: Okay, so if you're out of school then you won't be able to learn much. And **why** is that a problem if you don't learn much?

Jessie: 'Cause if you're not in school then you just won't be able to learn. Then the teacher won't be there to teach you anything.

Therapist: Yeah, so what is your sense of what happens to people who don't have teachers teaching them and aren't learning? What happens to people like that?

Jessie: When they grow up they don't have good jobs or something like that.

Therapist: **Why** would it be important for you to have a good job?

Jessie: So I can have a good living when I get older.

Therapist: Yeah, **why, why** would you want to have a good living?

Jessie: Ah, so ... uhm, so uh so like I can have like a good house and everything, stuff like that.

Therapist: Good house?

Jessie: Yeah, and then I wouldn't uh be like, what do you call it uh, I won't be in trouble or anything when I get older like going to jail or anything.

Therapist: And you said not going to jail ... to jail. [writing down on his notebook]

このように、この短いやり取りのなかでwhyが6回、how comeが2回使われ、少年に「なぜ？」を問う質問が頻繁に投げかけられている。さらにその内容は「なぜ停学になるのは悪いことなのですか?」「なぜ停学になって学校で学べないことはあなたにとって問題なのですか?」といった、いわば「当然」ではないかと思われるような事柄についても、質問がなされている。少年は*something like that, anything, like*を多用し、時に*so uh ...*と言い淀み、答えをいわば「ひねり出す」のに苦労しているようにも見える。

これまでもナラティブ・セラピーのセッションを社会言語学的に分析することを通してことばが映し出す社会を探ってきたが（饒平名 2014, 2015, Yohena 2017）、本稿では特にこのようなwhy-questionが連続して投げかけられた場面に焦点をあて、ナラティブ・セラピーにおける独特の質問技法とセラピストの意図、質問を受けた側の11歳の少年の応答の仕方や同席している母親の発言とも照らし合わせて、どのような世界が浮き彫りになるのかを分析する。そのことを通して、このようなナラティブ・セラピーにおける会話のごく一部であっても、それが相談者の置かれた社会的・文化的コンテクストの一端を映し出し、社会のドミナントな力に埋め込まれているストーリーを描き出しうる可能性を指摘する。

## 2. Why-question

Why-questionは、他のWH-question（what, where, when, which）と比べて答えるのが難しいと言われている（森 2015）。その理由として、「なぜ」という問いが向かう先（問いの焦点）が出来事（なぜ～が起きたのか）、行為（なぜ～するのか）、認識・主張・信念（なぜ～と思うのか）など複数あり得るため、返答も複雑となりうる事が挙げられる。問われた側は問いの焦点を解釈しながらでなければ答えが出せない（森 2015）。

セラピーにおいては、why-questionは「開かれた質問」の一つとされ、閉じられた質問よりも答えの幅が広がると考えられている。「閉じられた質問」はyes/no questionやwhich-questionなどのように、答えとして選べる内容が限られている質問である。例えば、「〇〇をしたことがあるか」という問いならば答えは「したことがある」「したことがない」のいずれかである。Yes/no questionだけでなく、「〇〇と△△のどちらが好きか？」といった選択肢が先に用意されその中から選ぶ形のものもある。「閉じられた質問」は、答えとして選ぶうる選択肢がある程度限られているため、答えやすい一方、それ以外の答えをすることが難しくなり、自由な考えや意見を述べることには適さないとされる。そのため、クライアントの深い部分にある複雑な心の思いを自由に語ってもらうためには、「開かれた質問」をうまく利用することが有効とされる

(Geldard & Geldard 2008)。

「なぜ」はこの開かれた質問の一つと考えることが可能であるが、セラピーにおけるwhy-questionについては、注意が必要という指摘もある。例えばErdman & Lampe (1996) は、子どものクライアントにとってwhy-questionは抽象的な思考を求めるため、他の質問よりも答えるのが難しいと指摘する。また、Tanner & Mathis (1995) は、セラピストのwhy-questionは子どものクライアントからは「批判」ととらえられる可能性があるとして述べている。Overholser (1993) もまた、why-questionの有用性ととも、この質問が合理的な説明を求めるものとして解釈されるときに、クライアントから自己防衛的な態度を引き出すことがあるとしている。

以上をまとめると、“Why?” は、yes/noといった答えの選択肢が限定されるものよりも、語り手の視点、解釈を知るうえで有効な質問である。クライアントがより深く考えることを促す。その一方、セラピストからの批判的・評価的なメタメッセージ(言語化されていない人間関係に関する情報や真の意図など)を持つ可能性も指摘されている。場合によっては相手の考え方に対する挑戦ととられることもあり、信頼関係がない話者同士で多用されると弊害(クライアントから自己防衛的な態度を引き出す、不信感を生み出すなど)がもたらされる可能性がある。そのため、その使用には注意が必要と考えられる。

### 3. ナラティブ・セラピーとwhy-question

では、本研究でとりあげるナラティブ・セラピーにおいて、why-questionはどのように考えられているのであろうか。それを説明する前に、まずナラティブ・セラピーについて述べておきたい。

ナラティブ・セラピーは、White & Epston (1990) によって始まった臨床実践である。バフチン、フーコー、ゴフマン、ブルーナー等の影響を受け、クライアントの抱える問題はクライアントが置かれた社会的文化的文脈の中で構成され人々に影響を与えていると考える。その根本的な姿勢はしばしば「人が問題なのではなく、問題が問題なのである」という考え方に象徴される。社会構成主義の立場に立つこの臨床実践においては、人を悩ます問題は社会の中で他

者や文化的期待、社会的にドミナントな規範などとの相対的な文脈の中で常に揺れ動く可能性を秘めたものとして取り扱われる。

また、人々に当然のこととして受け入れられているドミナント・ストーリーと、それにとって代わるオルタナティブ・ストーリーを区別する。例えば子育てでは女性のすべき役割といった考えがかつて社会の中で当然のこと（つまりドミナント・ストーリー）となっていた時代があった。しかしそれに対抗する別の考え方として、男性も女性と共に子育てに積極的に参加し協力する必要があるという考え（オルタナティブ・ストーリー）も可能である。このようなドミナント／オルタナティブという区別を応用して、ナラティブ・セラピーでは相談者（クライアント）にとって困った状況を生み出しているストーリーとその背景にある社会的な文脈を探求し、相談者にとって好ましいオルタナティブ・ストーリーを再著述する会話（re-authoring conversation）をセラピストとクライアントが共に紡いでいこうとする（国重 2013）。

さて、ナラティブ・セラピーの会話ではこのような目的のために、独特の質問技法が考案された。Madigan (2011) によれば、セラピストはオルタナティブ・ストーリーを広げる方法としてlandscape of action とlandscape of identity と Bruner (1990, 1991) が呼ぶ事柄に関する質問をすることがある。Landscape of actionに関わる質問は、相談者の人生において何がいつどう起きたのかを問い、それらの出来事が時間の流れの中でストーリーのプロットラインを形成する。一方landscape of identity questionsは、行為や結果について相談者がどのように解釈し結論づけているかに関わる質問である。また文化的なidentityや信条に関わる事柄も引き出す (Madigan, 2011, pp. 81-82)。セラピストの質問を通じて、問題の染み込んだストーリー (problem-saturated story) に変化がおき、それにとって代わるオルタナティブなストーリーが生成され、それは相談者の持つ能力や希望、夢、好ましいidentityの発掘につながると考える (Madigan, 2011)。Why-questionはlandscape of identity questionの一つとしてセラピーで用いられることがある。クライアントに自分のスタンスを選ぶことを促すうえで有効なものと考えられる (White, 2007, Madigan, 2011)。

また、問題を外在化する質問は、「クライアントやその家族が悪い」とクライアントを責めることを避けることを可能にするが、クライアントとセラピスト

の力の差から生じる不均衡な関係は、時に質問を尋問のようにしてしまう可能性があるという (Monk, Winslade, Crocket, Epston, 1997, Hollingworth, 2017)。セラピストはこの点に十分注意し、気を配る必要がある。そのための方法の一つに、質問を続けていいか許可を求めたり、答えにくい質問は答えなくても良いことを伝えることを挙げるセラピストもいる (Monk, Winslade, Crocket, Epston, 1997, p. 13)。

A therapy of questions can easily make the client feel like the subject of an interrogation. To avoid the power imbalance that might follow from this kind of conversation, I sought permission from Peter to ask him some more questions, saying that if I asked too many questions, he could either not answer them or tell me he was “questioned out.”

質問を積み重ねるセラピーは、クライアントに尋問されているという思いを容易にいだかせてしまう。この種の会話につきものの力関係の不均衡をさけるために、私はピーターにさらに質問を続けてもよいかという許可を求め、もしあまりにたくさんの質問をしたら答えなくてもよいし、「質問のしすぎ」だと言ってもよい、と伝えた。(国重・バーナード訳、2008、p. 12)

このように、ナラティブ・セラピーではセラピストがクライアントに対して持つパワーに敏感になり、クライアントが尊重されるために質問の技法が工夫された (Epston, p.c., 2016)。

次に、このような複雑な要素を持つwhy-questionが実際のセラピーの中でどのように用いられたかをみていきたい。

#### 4. データについて

本稿では、米国で市販されているDVD、*Narrative Family Therapy with Stephen Madigan, Ph.D.*を用いる。これはナラティブ・セラピーを学ぶための教材、モデル的なセラピー実践の録画として長年に渡りアメリカで利用されてきた。当初VHSであったが2011年にDVD化され、セラピストのMadiganも自身の著作

(Madigan 2011) の中でこのセッションについてページを割いて言及している。本稿の冒頭で述べた通り、セラピスト (Madigan) は中年の白人男性でカナダ在住である。クライアントは米国シカゴ在住のアフリカ系アメリカ人の少年 (Jessie、仮名) とその母親 (同じくアフリカ系アメリカ人) でDVDの資料によれば少年の年齢は12歳である。ただし、Madigan (2011) の本の中では11歳とされている。セラピーを受けに来た目的について、母親はセッションの初めの方で、Jessieが学校でトラブルを起こし (クラスメートに対する暴行事件)、裁判所から停学、罰金、保護監察、ボランティア活動に加えてアンガー・マネジメント (怒り管理のセラピー) を受けるよう指示されたためと述べている。

セッションはおよそ50分弱で、画面では左にセラピスト、中央に少年、右に母親が座っている。両端のセラピストと母親は中央に少し向くように座り、お互いにアイコンタクトがとれる。カメラは中央から3人を映しているが、時々一人一人をアップで映しだす。

DVDの中では、Madiganとその他のセラピスト達による解説やQ&Aの部分も収録されている。また、DVD (Instructor's version) 付属のInstructor's Manualにはセッションの SCRIPT とセラピストの解説が記載されており、セラピスト自身の解釈や質問の意図もいくつか説明がなされている。Madiganの著書 (Madigan 2011) でもこのセッションの解説があり、これらの情報も参考にしながらこのセラピーのインタラクションを分析していきたい。

## 5. データ分析

では、冒頭であげた会話部分を細かく区切りながら詳細に見ていこう。まずセラピストは、a troubled boy reputation と a good boy reputation のどちらを選ぶか、クライアントの少年に尋ねている。少年が a good boy reputation を選ぶとすぐに how come というセラピストからの質問が続く。

### 会話例2

Therapist: Which would you prefer to have – a troubled boy reputation or a good boy reputation?

Jessie: Good boy reputation

Therapist: **How come?**

Jessie: 'Cause I don't, I don't wanna be bad. I don't like to be bad or do anything.

この部分についてセラピスト自身が質問の意図を述べているのでそれを見よう。

Madigan Commentary: Again I bifurcate the question and ask [Jessie] to take up a position/protest on his preferred identity. When working with youth who feel no power it is important that they be invited to make claims away from certain stories and towards preferred claims about themselves. As you will see below, this line of questions privileges his story and it is done through Narrative Therapy questions that are both curious and respectful so as to afford [Jessie] a place in the discussion regarding his own story-making.

(Madigan 2011, *Instructor's Manual*, p.30)

つまりMadiganによれば、powerを持たないと感じている子どものクライアントに対しては、否定的なストーリーではなく好ましいストーリーを主張できるようにセラピスト側が招いてあげることが重要であり、そのための方策の一つとして二者択一の形でidentityを選ぶことを求める質問をするという。Jessieに対しても、学校でおきた事件をtroubleという表現で相対的に外在化し、「好ましいidentity」の立場を選び取れるような質問をした。その背後にあるのは、「クライアントへの関心と尊敬」の思いであり、それによってJessieが自分自身のストーリーを生成する場を作り出すことを目的としているとMadiganは述べている。こうしてこのあと一連のwhy-questionが投げかけられるのだが、セラピストの意図がわかったところで、ではJessieの応答の仕方を分析することにより、実際には何が起きていると考えられるか、考察していきたい。

Jessieの応答（必ずしもwhy-questionに対する直接のanswerではなく、どのように反応したか）を見ていくと、言語上繰り返し起きるいくつかの特徴がある。



1. Jessieの発言の冒頭に*because* ('cause), *so*, *then*がしばしば使われる。
2. *Something like that, stuff like that, like, (or) anything*を最後につける。
3. *Uh, um...*などがしばしば挿入される
4. 同じ内容を繰り返すことがある。

ではこれらの特徴について少し細かく見ていくことにする。

### 5.1 because, so, then の使用

発言の冒頭部に*because* (その省略形の 'cause) や*so*が使われることがしばしばあった。例えば、'causeを冒頭で使っている発話例は次のとおりである (下線部)。

- (1) Jessie: 'Cause I don't, I don't wanna be bad. I don't like to be bad or do anything.
- (2) Jessie: 'Cause then you will get suspended from school or something, something like that.
- (3) Jessie: 'Cause then, you'd, if you're out then you then don't learn that much.
- (4) Jessie: 'Cause if you're not in school then you just won't be able to learn.  
Then the teacher won't be there to teach you anything.

*So*が使われた発言は次の通りである。

- (5) Jessie: So I can have a good living when I get older.
- (6) Jessie: so ... uhm, so uh so like I can have like a good house

*Then*の使用もしばしば見られた。

- (7) Jessie: 'Cause then, you'd, if you're out then you then don't learn that much.
- (8) Jessie: 'Cause if you're not in school then you just won't be able to learn.  
Then the teacher won't be there to teach you anything.

- (9) Jessie: Yeah, and then I wouldn't uh be like, what do you call it uh, I won't be in trouble or anything

なぜ 'cause (because) や so が発言冒頭でしばしば使われるのか。また、文頭ではないが then もしばしば挿入されたのはなぜか。それは一つには質問は応答を相手から求める隣接応答ペア (Schegloff & Sacks, 1973) を成し、why-question は「なぜなら～だから」という形で答えることでその隣接応答ペアの応答部を満たすことができるからであると考えられる。統語的な形式上の要請に答えているといえる。また Schiffrin (1987) は、because や so は話者が自分の言語行動に一貫性 (coherence) をもたせるために使うことがあり、自分の意見・立場に対するサポートを示す機能も持つと指摘している。後ほど触れるが、実際の Jessie の応答内容は、質問やその前の答えの一部を繰り返しているだけの部分もあり、必ずしも実質的な「なぜ」に対する「答え」ではないことがある。それにも拘わらず、冒頭部に 'cause (because) や so を置くことで、何とか答えを提供している形を整える。また、投げかけられた質問に対して自分の意見や立場をサポートする情報を付け加えることによって、セラピストの質問の趣旨に沿う会話のやりとりを進めようとしている側面がうかがわれる。

## 5.2 *Something like that, like* 等の多用

もう一つの特徴として、「～のような」、「～とか」を示す表現の多用 (general extender と呼ばれる。something like that, stuff like that, like, or anything など) が挙げられる。

- (10) Jessie: Cause then you will get suspended from school or something, something like that.
- (11) Jessie: When they grow up they don't have good jobs or something like that.
- (12) Jessie: so ... uhm, so uh so like I can have like a good house and everything stuff like that.
- (13) Jessie: I wouldn't uh be like, what do you call it uh, I won't be in trouble or

anything when I get older like going to jail or anything.

答えとして一つの例を述べ、そのあとに*something like that, stuff like that, like*を付けることにより、具体的なほかの例はいちいち挙げないが「その類のもの」があることを示している。*Like*の多用も、答えを探すまでの間を持たせると同時に、これが唯一の答えというわけではなく、ほかにもいろいろあるということを暗に示している。Cheshire (2007) によればこれらの表現は、聞き手との情報共有や人間関係の調整の機能があるとされている。ここでもまた上の5.1で挙げたように、セラピストからの質問であること、*why*がしばしば「合理的説明」を求める隣接応答ペアーを成すことからくる応答へのプレッシャーに、少年が応えるべく努力している様子がうかがわれる。

さらに、*uh*や間が質問の特に後半部分で増えてきており、ここでも少年が応答に苦慮している様子が見えてくるのではないだろうか。

### 5.3 繰り返しの内容

同じ内容が問いと答えの両方に繰り返されている箇所もあった。例えば、次の抜粋箇所で、セラピストは「もし（停学になって）あまり学べないと、なぜそれが問題なのですか」と尋ねている。それに対して、「なぜなら、もし学校に行かなければ、たくさん学べないからです」とJessieは答えている。「学ぶことができない」に相当する部分に下線を付けて示した。

#### 会話例3

Therapist: Okay, so if you're out of school then you won't be able to learn much. And **why** is that a problem if you don't learn much?

Jessie: 'Cause if you're not in school then you just won't be able to learn. Then the teacher won't be there to teach you anything.

このように、「あまり学べないのがなぜ問題か」と聞かれて、「だって学べないから」「先生が教えてくれないから」と答えている。また、セラピストの質問で使われた*you*がJessieの答えでも繰り返し使われており、Jessie個人がどう

なのかというよりも、学校で学べない人は一般的にどうなるのか、という観点からJessieはセラピストの使用した表現を自分の答えに取り入れているようである。

ここで使われたyouが一般的な人を表すのであるならば、「学べないことがなぜ問題なのか」という問いは、一般的にあまりにも当たり前で、Jessieにとって一般論としての答え以外に言いようがなかった可能性がある。セラピストはこのような一般論として学校で学べないことがもたらす問題から、Jessie個人がどう考えるかという方向へこのあとすぐに質問を変えた。

Therapist: Yeah, so what is your sense of what happens to people who don't have teachers teaching them and aren't learning?

先生が教えてくれず学習ができない人に「君の認識・理解では（何が起きるか）」（what is your sense of …）という際に名詞句your senseを使った聞き方は、“What do you think?”という質問に比べてみると興味深い。“What do you think?”は、いかにも自分の考えをあからさまに述べることを迫る感がある。しかし、“What is your sense of …”という聞き方ではそのような圧迫感がやわらげられるのではないだろうか。こうしてこのあと、Jessieは主語をyouからIに変えて、自らの物語を語り始める。それについては、6の応答内容の分析で触れる。

#### 5.4 答え方の特徴のまとめ

ここまでの考察をまとめると、まず、セラピストの意図としては、why-questionは、Jessieに自分のストーリーを語るスペースを作り出し、彼にとって「好ましいidentity」を選び取ることを支援するナラティブ・セラピーの質問技法の一つであった。その結果としてJessieは質問に応える形で発話順番をとり、「なぜ」という質問に応える努力をした。

しかし、why-questionの連続はJessieにとって時に答えにくい立場に立たせることにもなったと思われる。それは、'causeやsoを冒頭部につけてwhyに対する答えの形を整えたが、文末にはsomething like that, stuff like that, anythingなど

の表現がしばしば付け加えられ、答えとして適切な例を一つ挙げるのが精一杯であったかのように見られる。このことはuh, umが複数回使われていることや間の挿入などの点からも示される。Identityを選び取る質問ではあるが、powerを持たない年少者のクライアントにとっては、頻繁なwhy-questionは対応が難しかった可能性も否めない。

ナラティブ・セラピーでは、カウンセラーの「ねばり強さと好奇心が決定的な要素となる」(Monk, Winslade, Croket, Epston 1997, 国重・バーナード訳 2008, p. 17)と言われている。では、Jessieがすぐに答えを出せないこと、時に答えにくくて考え込むような質問を粘り強くすることによって語られた内容が映し出すものは何だったのであろうか。<sup>iii</sup>即座に答えが出てこないような場合でも、そのプロセスを経ることで、クライアントが新たに何かを発見したり、新しいアイデンティティを生成したりそれを「分厚く」することをセラピストは支援していくという (White 2007)。<sup>iv</sup>

## 6. 応答内容の分析

このセクションでは、クライアントの少年が答えた内容と母親がこれ以外の場で話した関連事項を分析し、少年の答えが映し出す社会的コンテクストを考える。まず少年の語った内容からみていく。

### 6.1 少年が語る因果関係のストーリー

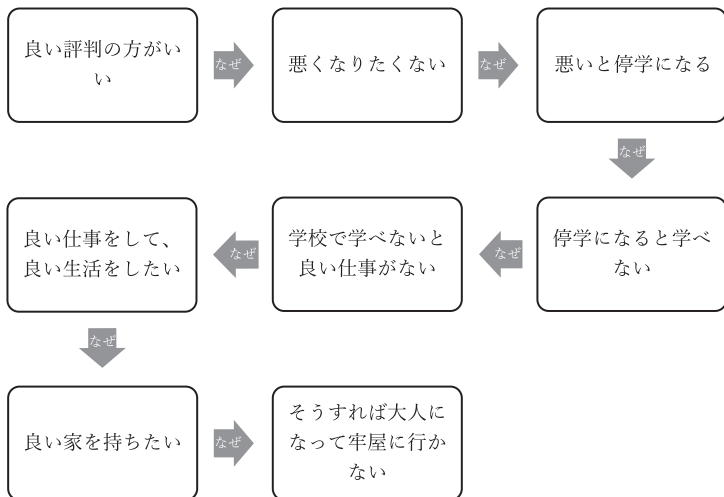
セラピーにおけるこの部分のテーマは、「a good boy reputationがもたらすものは何か、なぜJessieにとって a good boy reputationが大切か」であった。この質問はJessieの答え「停学になると学校で学べない」「先生がいて学べることは(将

---

iii 石河 (p.c.) は、ナラティブ・セラピーにおいては開いた質問、閉じた質問という区別というよりも、何の目的でどのような形の質問が使われたのか、その後の展開も含めて吟味する必要があると指摘している。

iv 石河 (p.c.) によれば、質問の答えにくさはWhite (2007) のいう scaffolding (足場作り) との関係で考えることができるという。つまり、簡単には答えられないが考えることで答えに届くことが可能な領域への質問の検討がナラティブ・セラピーでは重要となる。

図1 少年の応答内容の概略



来の)良い生活につながる「刑務所に行かないですむ」ことへとつながっていった。図1に彼の応答の概略を順番に示す。セラピストの「なぜ」に引き出されたストーリーである。

「なぜ良い評判の方がいいか」といった当たり前のように思われる事柄についても、セラピストは詳しく聞いていった。これは、クライアントの知識、知恵、経験から探ろうとするナラティブ・セラピストのスタンス (Monk, Winslade, Crocket, Epston 1997) の表れともいえるかもしれない。又、概知の領域から一步離れて、Jessieにやれそうな事へと向かう足場作り (White 2007) にも貢献しているのではないか。その際に気を付けたいのは、セラピストが巧みにagentを入れ替えている点である。一般論として、“What happens to people who don't have teachers teaching them and aren't learning?” (先生が教えてくれず学べない人はどうなりますか?) と初めに聞いても、その次には“Why would it be important for you to have a good job?” (君にとってなぜ良い仕事を持つことが大切なのですか) というふうに、切り口を変えている。これにより、少年は自分に関する物語を語る場に招かれている。このことは後半でジェシーの発言における主語がyouからIに変化していることにも反映されている。

I can have like a good house

I won't be in trouble or anything when I get older like going to jail

学校で学び卒業して仕事につき家を持つ、という未来のサクセス・ストーリーは、一見社会において当然の価値としてみなされるドミナント・ストーリーではないだろうか。しかし実は少年にとっては必ずしも当たり前に入ることではないことが、ここで浮かび上がるように思われる。だからこそ、それはクライアントにとって大切なものであり、セラピストからの質問を通して、「選びとり言語化する」プロセスが必要となったのではないか。「悪い評判の少年」という「問題」から距離を置き、「良い評判の少年」というidentityの風景がもたらすオルタナティブ・ストーリーが描かれ始めた場面でもある。

もう一つ注目したいのは、*why*や*how come*の連続にも関わらず、Jessieは「良い評判の少年」が紡ぎだす将来の良い生活という物語を語り続けた、という点である。繰り返しJessieは学校で勉強し良い評判を得て良い仕事・良い暮らしができることの大切さを語る。このように繰り返して良い評判の少年の生き方を選び取ることは、Jessieの中にある「良い評判の少年」というidentityを得ることへの固い意志を表現し、そのようなidentityを「分厚くする」(thicken)ことに貢献していると考えられるのではないだろうか。

この点をさらに探るために、今度は聞き手としての母親の存在と学校に関する発言を見ていきたい。

## 6.2 聞き手としての母親の存在と話し手としての母親の発言内容

Goffman(1981)は、聞き手と一口に言っても、是認された聞き手(ratified listener)と是認されていない聞き手(unratified listener. 例えば通りがかりにたまたま会話が入ってしまった人)がおり、ratified listenerはさらにaddressed listener(話し手から直接話しかけられている人)とunaddressed listener(会話の場にいることは認められているが、直接話し手から話しかけられているわけではない人)がいることを指摘した。個々の場面ではMadiganはJessieの方を向いて彼に質問をしているので、Jessieが是認された聞き手であり、Madiganの質問に答える義務を負う。実際Jessieはセラピストの方を向き、彼とアイコンタ

クトをとりながら話す。しかし、同時にその場にいる母親もまたJessieの答えを聞いている。母親はratified listener（是認された聞き手）だが、unaddressed listener（直接話しかけられていない聞き手）である。このような場では、JessieはMadiganの質問に答えつつも、同時にその場にいる母親も聞き手として含んだ場で語っているのである。

このことを踏まえると、学校教育の大切さを認識する答えは、母親の意見・考えを反映し、それに賛成する内容として提供されている可能性もある。後半部分で母親が「Jessieにとって学校は安心して教育を受けられる場所ではなくなった」ことについて不満や不安を述べるが、その点とも合致する。

では具体的に母親はどのように「学校教育を受ける機会」について語ったのか、次に見ていきたい。それは「黒人男子は、すぐにトラブルの標的にされる」という懸念に要約される。

#### 会話例4

Therapist: Do you think that trouble might find the African American children in the school quicker and they'll unfairly develop reputations of trouble more than the white children in the school?

Mother: I think so.

#### 会話例5

Mother: This school district here, it just seems like, at least a little anything, things that could be straightened out, the district makes a big thing out of. And if the kids get to high school, if he doesn't watch what he's doing, I mean real careful, be real careful, they are out.

Therapist: I see. Do you have a sense as to why the school district here is structured this way and the one you used to be in is not?

Mother: Yes, I know why.

Therapist Why is that?

Mother: I was told that they hadn't got used to the black kids going to this school.

… [少し後で]



Mother: …it seemed like, uh, once the boys .. get in that school district, they really have to be careful. Uh, the girls can get out pretty good if they don't get to be bad girls, but the boys have to really watch their self real careful and everything they do.

これらの会話では、母親は今の学区では黒人の男子が学校でトラブルにとらえられやすいこと、それゆえに黒人の男子は学校ではあらゆることについてよく気を付けて行動しないとすぐに退学になってしまうことを語っている。今Jessieがいる学区は白人が多く黒人の扱いに先生が慣れていないと言われた経験も語り、そのような学区の持つ社会的コンテクストにおける学校教育の場に対する懸念が語られるのである。

ここでもまた、母親の語りはセラピストに向けられていると同時に、Jessieに対しても向けられている。Jessieには今後学校で十分に気を付け、周囲からの悪い評判につながるようなことは決してしてはいけない、と改めて注意喚起をする役割も果たす。こうして、Jessieが将来学校教育を受けていく上での社会的な困難が確認されていった。Jessieが語っていたコミュニティでの「良い評判」が「大人になった時に刑務所に行かないですむ」ことにつながる因果関係のストーリーは、現実的な重みをもってこのクライアント親子にのしかかっていることが、この母親の懸念からも示唆されるのではないだろうか。

本稿ではセッションのこのあとの後半のやり取りについて詳細をとりあげる紙面的余裕がないが、後半はジェシーにとってどうしたら学校が安全な場所になるかがテーマとなった。母親は「学区の側が黒人に対する対応を変えなくてはならない」ことを指摘している。さらに、セッション後にセラピストは校長に手紙を書き、この少年に関して負のプロファイルが学校で残っていくことに対する懸念と、そのようなことがないように配慮するよう要請をしている (Madigan 2011)。

## 結論

本稿では、why-questionが映し出す社会をJessieとセラピスト、及び母親の会話を通して考察した。その結果、次のようなことを指摘した。まず、形式上の

考察として次の点を挙げた。

1. Why-questionをしたセラピストの意図は、クライアントに自分の物語を語るスペースを提供すること、そして好ましいidentityを選び取ることを支援することにあった。
2. 大人に比してpowerがないと感じている子どものクライアントにとっては、それは発言権をもらい、語るために会話の場に招き入れられる機会となった。
3. その一方で、「(合理的) 説明」を求められていると解釈される可能性のある「なぜ」を頻繁にセラピストがすることは、答えを求められた形に調整するという負担をクライアント側に生じさせる。
4. そのような負担は具体的には形式だけは答えているように整えたり（冒頭の*because, so*）、発言の最後に自分の答えは例の一つに過ぎないことを示唆するような表現を足す（*something like that*）といった工夫へとつながったと思われる。
5. 言い淀み、間がしばしば挿入された。これは答えが即座にできるものではなかったことを示唆している。

次に語られた内容の考察から、次の点を挙げた。

1. 学校で教育を当然のこととして受けられない人々がいること。このクライアント一家にとっては、学校はもはや安心して教育を受ける場ではなくなっている。
2. Ratified unaddressed listener (Goffman 1981) も聞き手に含む家族療法のような語りの場では、家族としてクライアントが置かれた社会的・文化的コンテクストが映し出され、家族の価値感が埋め込まれた家族のストーリーが紡ぎだされる可能性がある。
3. そのようなストーリーは、米国におけるアフリカ系アメリカ人の、特に若い男子とその家族が置かれている社会的に厳しいコンテクストを本データでは描いている。

早川（2009）が指摘しているが、共感を伴った傾聴が必ずしも当事者の物語の尊重にはならず、むしろ「共感した」と思うこと自体が当事者の物語をその

まま受け取ることを難しくすることがある。さらに早川（2009, p. 95）は、「セラピストは無知の姿勢において、自分の個人語—専門用語とさまざまな予断からなる—を括弧に入れ、他者を理解するために、まず他者の個人語に密着する。」と指摘した。本研究においては、「良い評判の少年」が何を意味しているのか、白人のセラピストは、自分のコンテキストにおける理解ではなく、クライアントの置かれたコンテキストにおける意味を、質問を通して明らかにしようとしたと言えるであろう。

時に答えづらいwhy-questionであったが、このやりとりを通して映し出されたのは、黒人の若い男子が白人の多い学区で置かれている厳しい現実の一端であったとも言える。そこで引き出された物語は、周囲から良い評判を得ることの先にある良い生活、あるいはいったん悪い評判を得てしまうとそれに付随して起こる他のトラブル（例えば刑務所行き）という将来を示唆する社会的コンテキストであった。セラピストは、クライアントが置かれているこの独自の社会的コンテキストにおける言葉の意味を探る必要がある。本稿で分析した箇所では、それは学校で教育を受けるという主流派にとっては当たり前のことが、当たり前には保証されないマイノリティの人々の状況と、それが将来に続く影響（刑務所に入るか否かを含む）であった。学校で先生に教えてもらう、ということが白人と黒人では異なる重みを持っている可能性を示唆した。

## データDVD

*Narrative Family Therapy with Stephan Madigan.* (2011) Mills Valle, CA: Psycoterapy.net.  
(VHS版オリジナル: Carlson, John and Diane Kjos (1999) *Narrative Family Therapy with Stephan Madigan* [Family Therapy with the Expert Series Videotape] Boston, MA: Allyn and Bacon.)

## 参考文献

- Bruner, J. (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge, MA: Harvard university Press.  
Bruner, J. (1991). The narrative construction of reality. *Critical Inquiry*, 18, pp. 1-21.  
Epston, D. (2016). Plenary address at American Marriage and Family Therapy Association. Indianapolis.  
Erdman, P. & Lampe, R. (1996). Adapting basic skills to counsel children. *Journal of Counseling & Development*. Volume 74. pp. 374-377.

- Cheshire, J. (2007). Discourse. variation, grammaticalization and stuff like that. *Journal of Sociolinguistics*. 11/2 pp. 155-193.
- Geldard, K. and Geldard, D. (2008). *Counselling children: A Practical Introduction* (3<sup>rd</sup> edition). London: Sage Publications.
- Goffman, Erving. (1981). *Forms of talk*. University of Pennsylvania.
- 早川正祐 (2009). 「ナラティブ・セラピーとケア当事者の物語の重視とは何か」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室応用倫理・哲学論集 (4)』, pp. 83-97.
- Hollingworth, A. (2017). So you think your counseling practices are collaborative? *Psychotherapy and Counseling Journal of Australia*. No. 5. Vol. 1.
- 国重浩一 (2013). ナラティブ・セラピーの会話術 金子書房
- Madigan, Stephan. (2011) *Narrative therapy: Theory and practice*. New York: American Psychological Association Press. (マディガン・ステファン 児玉達美・国重浩一・バーナード紫・坂本真佐哉訳 (2015) 『ナラティブセラピストになる：人生の物語を語る権利を持つのは誰か』 北大路書房)
- Monk, Gerald., John Winslade, Kathie Crocket, and David Epston. (eds.) (1997). *The Jossey-Bass psychology series. Narrative therapy in practice: The archaeology of hope*. San Francisco, CA: Jossey-Bass. [国重浩一・バーナード紫訳, 2008 『ナラティブ・アプローチの理論から実践まで』 北大路書房]
- 森才三 (2015). 社会科授業における「なぜ」発問の実践方略—「問いの対象」と「問いの観点」に注目して—『社会科教育研究』全国社会科教育学会第82号. pp. 13-24.
- Overholser, J.C. (1993). Elements of the Socratic method: I. Systematic questioning. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*. 30 (1). pp.67-74.
- Schiffrin, Deborah. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E.A. & Sacks, H. (1973). Opening Up closings. *Semiotica* 8. pp. 289-227.
- Tanner, Z. & Mathis, RD. (1995). A child-centered typology for training novice play therapists. *International Journal of Play Therapy*. 4 (2). pp.1-13.
- 饒平名尚子 (2014). あるナラティブ・セラピーにおけるセラピストの立場と語りへの影響—インターアクションの社会言語学的観点から『フェリス女学院大学文学部紀要』第49号 pp. 61-85.
- 饒平名尚子 (2015). ナラティブ・セラピーにおける間テキスト性とスモール・ストーリー—アイデンティティ形成への影響『ことばと人間』第10号. pp. 39-56.
- Yohena, Shoko O. (2017) Power, Race and Communicative Styles in Cross-ethnic Narrative Therapy. A Poster Presentation at 19<sup>th</sup> International Pragmatics Conference (Belfast.)
- White, Michael and David Epston (1990) *Narrative means to therapeutic ends*. New York: Norton.
- White, Michael. (2007). *Maps of Narrative Practice*. New York: Norton.